

ホラティウス『詩論』338: *proxima veris* 「できるだけ真実に近いもの」について

西井奨 (大阪大学)

vraisemblance 「真実らしさ」という概念について解説される時、まずアリストテレス『詩学』9.1451a 36-38の *eikos* 「ありそうなこと」に言及されるのが一般的である。その一方で、ホラティウス『詩論』338においても、*proxima veris* 「できるだけ真実に近いもの」という表現があることから、*vraisemblance* という概念が形成されていくにあたり、『詩論』も一定の役割を果たしたと思われる。この *proxima veris* については、諸注釈によると、*verisimilia*、すなわち一般的に *vraisemblance* として理解されている概念として捉えられているようである。しかし、ここでの *proxima veris* は、『詩論』中の文脈を踏まえるならば、*vraisemblance* という概念よりもずっと限定的な内容が意図されたものなのではないだろうか。

『詩論』では 338 に続いて、「昼食をとったラミアの胃袋から生きた子供を引っ張り出すようなことをしてはならない」ということが述べられる (340)。この箇所と関連して想起されるのが、『詩論』179-188 である。ここではメディアの子殺しやアトレウスの人肉調理、プロクネ・カドモスの変身を舞台上ですべきではないということが述べられる。この箇所を踏まえるなら、340 のラミアに関するしてはいけないということも、舞台上だけに限定されるものだと推論できる。338-340 が 179-188 を踏まえるということは、両箇所の他の表現の呼応性 (*credi* (339) と *incredulus* (188)、*voluptatis causa* (338) と *odi* (188)) や *fabula* (339) が「劇」と解釈されることから支持できる。とすると、340 のラミアに関する内容は、報告者による語り (cf. 183-184) によるものならば看過されるものなのである。

子殺しも人肉調理も変身もラミアの胃袋も、舞台上で現実に見せることは不可能である。これらを舞台上で見せようとするれば、「舞台上の俳優を神話上の人物と見なす」ことに加えて、真実でないものをこの場では真実であると思なすよう観客に要求することになる。だからこそこれは *proxima veris* に反するとして退けられなければならないのである。結局、*proxima veris* (338) はあくまで「舞台上で見せること」に限定されたものであり、報告者による語りにも適用されるものではなく、したがって物語創作全般に適用されるような *vraisemblance* というわけではないのである。

ホラティウス『詩論』では、*ut pictura poesis* 「詩は絵のごとく」(361) という言葉が文脈から切り離され一人歩きする形で受容されたが、この *proxima veris* (338) もそうなのではないだろうか。